



ゴキブリ
のいない
八月

川崎ゆきお

「今年の夏は少しおかしいんだ」

「どうかしましたか」

「ゴキブリがいないんだ」

「それはよかったですねえ」

「毎年出るんだが、いないんだ。いや、一匹か二匹姿を見たが、その後出ない。あれは様子を見に来たのかなあ。その一匹を見た後、いつもなら、一杯いる。台所に入れば、さっと逃げ出すがね。何匹かはいた。流しの下に立て付けの悪い戸があってねえ。物入れだが、その戸の裏に子供のゴキブリがいて、ぞっとしたことがある。使わない食器などを段ボールに入れて突っ込んで。貰い物の皿とかあるでしょ。使わないような大皿。そんなものも突っ込んで。普段は開けない。だから、そこが巣になってるんだ。ところが、今年はいない」

「それが異変ですか」

「ゴキブリの嫌がるような天敵がいるのかと思ったのだが、何かよく分からん。天敵は人かもしれんしね」

「はい」

「毎年ゴキブリを見かけていたので、見なくなると、おかしいと思うだろ」

「よかったですと思いますよ」

「去年、いや、その前の年かな。ゴキブリ退治が面倒だし、叩くと潰れるので、汚い。それで、ゴキブリ取りを仕掛けたんだ。小さな丸い樹脂製の固まりでね。腕時計の盤ほどの大きさだ。少し透き間が空いていて、そこから何かが出るんだろうねえ。電気は使わない。それを方々に仕掛けたよ。これに近付いても、死なない。しかし、しばらくしてから死ぬらしい。それに感染するようで、巣に戻って仲間に移したりするようだ。これは効いたなあ。それで見かけなくなった。しかし、流し台の下を覗いたけど、死骸はない。巣は別のところにあったんだろうねえ。いくら探しても、ゴキブリの死骸はない。床下かもしれないねえ」

「じゃ、そのゴキブリ退治の仕掛けが効いたので、ゴキブリは懲りて二度と来ないのかもしれないよ」

「それを仕掛けたのは二年前だ。もう効き目はないはずだ。まだ、その辺に地雷のように転がっているがね」

「じゃ、学習したのでしょ」

「それとだ」

「まだ、ゴキブリの話、続きますか」

「蚊だ」

「今度は蚊取りの話ですか」

「いや、何もしていないのに、今年は少ない。台所には相変わらず多いがね。特に三角の、あのコーナーの奥、あれの中だ。卵の殻とか捨てるだろ」

「はいはい」

「そこにいる蚊は、いつものようにいるが、刺しに来る蚊が減った。激変だ」

「はい」

「寝る前、耳元でうるさくてねえ。はたいてやろうと、耳をはたいてしまい、しばらく耳がじーんと鳴っていたよ」

「はい」

「しかし、今年は滅多に飛んで来ないんだ。場所は決まっている。私がいつも座っている場所だ。そこに座った瞬間に刺される。待ち伏せしているんだ。私は餌だね」

「その蚊も減ったと？」

「半分以下、いや、それ以下だ。毎年足や腕に赤いのがつく。刺された跡だ。それが一割ほどになってる。刺されることは刺されるが、激減だよ」

「はい」

「どう思う？」

「よかったですねえ」

「家の前の環境は変わっておらん。庭に雑草が生えておるが、毎年のことだ」

「はあ」

「異変が起こるんじゃないのかね」

「まさに虫の知らせですね」

「そうだろ」

「まだ、夏は終わってませんよ」

「そうだろ。この後、何か異変が起きそうだ」

「その他、変わったことは」

「うちにはネズミは出ない。しかし、見かけた」

「はあ」

「ドブネズミだ。さすがにネズミが入るほどぼろ屋じゃない。流しの管から上がってきたんだろ
うねえ」

「そのネズミ、どうなりました」

「三日ほど、気配がしていたが、消えた」

「じゃ、また、下水管から逃げたのでしょ」

「ゴキブリが消え、ネズミが出た。しかし、すぐになくなった」

「はい」

「ネズミも逃げ出したんだ」

「大丈夫ですか」

「どちらがだ？」

「ああ、あなたのことじゃなく、異変の方です」

「私が異変を起こしたと言いたいんだろ」

「違います」

「それならいいんだが」

異変というのは分からないところで起こっていることがある。影響がなければ、気にもしない。しかし、何処かで起こっているのだろう。

了